

『躬恒集』注釈（十二）

平沢竜介・嶋田陽子・玉木紗也香・
中井瑞葉・福地治子・渡辺優子

728 住^すみよしと海^{あま}人は言^いふとも長^{なが}居^{がみ}すな人^{わす}忘れ^{くさ}草^{さし}岸^しに生^おふてふ

【他出文献】

あひしれりける人の住吉にまうでけるによみてつかはしける

みぶのただみね

すみよしとあまはつぐともながるすな人忘草おふといふなり

（古今和歌集・卷十七・雑上・九一七）

（題しらず）

（よみ人しらず）

すみよしとあまはいふともながるすな人わすれぐさおふといふなり

（新撰和歌・卷四・恋雑・二九九）

あひしりたる人のすみよしにまうつとてきゝて

すみよしとあまはいふともながるすな人わすれくさきしにおふてふ

（忠岑集Ⅱ・七五）

【語釈】

○住みよし―地名の「住吉」に「住み良し」を掛ける。「住吉」は、摂津国の歌枕。大阪府住吉区の一帯。○長居すな―長くいるな。○人忘れ草―人を忘れさせるという草。

【通釈】

住みよいと漁師が言っても長く留まるな。住吉には人を忘れさせるという草が岸に生えていると言う。

【類歌・参考】

つのくににまかれりけるに、しりける人にあひ侍りて (よみ人しらず)

宮こにはすみわびはててつのくにの住吉ときくさとにこそゆけ (拾遺和歌集・卷九・雑下・五三九)

奉幣使にてすみよしにまゐりて、むかしすみけるところのあれたりけるをみてよみ侍りける

津守有基

すみよしとおもひしやどはあれにけり神のしるしをまつとせしまに (新古今和歌集・後出歌・一九九四)

(題しらず) よみ人しらず

忘草たねとらましを逢ふ事のいとかくかたき物としりせば (古今和歌集・卷十五・恋五・七六五)

(題しらず) よみ人しらず

こふれども逢ふ夜のなきは忘草夢ぢにさへやおひしげるらむ (古今和歌集・卷十五・恋五・七六六)

(題しらず)

むねゆきの朝臣

忘草かれもやするとつれもなき人の心にしもおかなむ

(古今和歌集・卷十五・恋五・八〇二)

寛平御時御屏風に歌かせ給ひける時、よみてかきける

そせい法し

忘草なにをかたねと思ひしはつれなき人の心なりけり

(古今和歌集・卷十五・恋五・八〇二)

729

秋風こゑに声をほにあげて来る舟ふねは天あまの門とわた渡る雁かりにざりける

【他出文献】

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原菅根朝臣

秋風こゑにこゑをほにあげてくる舟はあまのとわたるかりにぞありける

(古今和歌集・卷四・秋上・二二二)

左

藤原菅根朝臣

秋風に声を帆に上げてゆく舟は天の戸わたる雁にざりける

(寛平五年九月以前皇太夫人班子女王歌合・十卷本・一一〇)

秋風丹音緒帆丹拳手来船者天之外巨雁丹曾阿里芸留

(新撰万葉集・卷上・一一七)

【語釈】

○声をほにあげて―声を高くあげて。「ほにあげ」に「帆」を掛ける。○天の門―天の海峡。「帆」「舟」「天の門」
「渡る」は縁語。

【通釈】

秋風に帆をあげるように声を高々とあげてくる舟は、天の海峡を渡る雁であることよ。

【類歌・参考】

(題しらず)

さ夜ふけてあまのと渡る月影にあかすも君をあひ見つるかな

(よみ人しらず)

(古今和歌集・卷十三・恋三・六四八)

返し

よみ人しらず

水まさり浅きせしらずなりぬともあまのと渡る舟もなしやは

(後撰和歌集・卷五・秋上・二二八)

七日

よみ人しらず

織女のおまのとわたるこよひさへをち方人のつれなかるらむ

(後撰和歌集・卷五・秋上・二三八)

(題しらず)

前大納言資賢

たちかへりあまのとわたるかりがねははかせにくものなみやかくらむ

(新勅撰和歌集・卷一・春上・五〇)

730 吹く風を鳴きてうらみよ 鶯は我やは花に手だに触れたる

【他出文献】

(題しらず)

吹く風をなきてうらみよ鶯は我やは花に手だにふれたる

(よみ人しらず)

(古今和歌集・卷二・春下・一〇六)

【語釈】

○やは―反語。○手だに―手さえ。手だけでも。

【通釈】

吹く風を鳴いて恨みなさい鶯は。私は花に手だけでも触れたらどうか(触れはしない)。

【類歌・参考】

(題しらず)

ちる花のなくにしとまる物ならば我鶯におとらましやは

(典侍治子朝臣)

(古今和歌集・卷二・春下・一〇七)

仁和の中將のみやすん所に歌合せむとてしける時によみける

藤原のちかげ

花のちることやわびしき春霞たつたの山のうぐひすのこゑ

(古今和歌集・卷二・春下・一〇八)

うぐひすのなくをよめる

そせい

こづたへばおのがはかせにちる花をたれにおほせてこころなくらむ

(古今和歌集・卷二・春下・一〇九)

鶯の花の木にてなくをよめる

みつね

しるしなきねをもなくかなうぐひすのことしのみちる花ならなくに

(古今和歌集・卷二・春下・一一〇)

731

二声ふたごゑと聞きくとはなしほと、きすに郭よぶか公夜深よぶかく目めをもさましつるかな

【他出文献】

夏の夜、しばし物がたりしてかへりにける人のもとに、又のあしたつかはしける

伊勢

ふた声と聞くとははなしに郭公夜深くめをもさましつるかな

(後撰和歌集・卷四・夏・一七二)

ふたこゑときくとはなしにほと、きすよふかくめをもさましつるかな

(伊勢 I・二九)

【語釈】

○夜深く―夜明けまで、まだ間がある様。明け方、夜の気配が残っている様。

【通釈】

郭公の声をふた声と聞くこともなく、まだ夜の気配が残っている明け方目をさましたことだ。

【類歌・参考】

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

紀とものり

五月雨に物思ひをれば郭公夜ぶかくなきていづちゆくらむ

(古今和歌集・卷三・夏・一五三)

(寛平御時きさいの宮の歌合のうた)

(紀とものり)

夜やくらき道やまどへるほととぎすわがやどをしもすぎがてになく

(古今和歌集・卷三・夏・一五四)

(題知らず)

(よみ人しらず)

はつこゑのきかまほしさに郭公夜深くめをもさましつるかな

(拾遺和歌集・卷二・夏・九六)

《これより夫木和歌抄による補遺。永青文庫本による》

732 東路あづまぢのいさねの里はつは初秋はつの長ながき夜よひとりあかす我われなぞ

【他出文献】

あづまぢのいさめのさとは初秋のながきよをひとりあかす我がなぞ

(古今和歌六帖・卷一・一三二)

【語釈】

○いさねの里は―「いさねの里」は、東国の歌枕。所在地未詳。「いさね」に「いさ寝」「さあ寝よう」の意を掛ける。「は」は感動、詠嘆を表す終助詞。

【通釈】

東路のいさねの里とは。そのいさねの里で初秋の長い夜を一人であかす私はどうしてなのか。

【類歌・参考】

明石浦をよめる

俊頼朝臣

あまをぶねとまふきかへす浦風にひとりあかしの月をこそみれ

(新古今和歌集・卷十六・雑上・一六〇二)

雨夜思といふことを

後伏見院御歌

ひとりあかすよもの思ひはききこめぬただつくづくとふくる夜の雨 (風雅和歌集・卷十六・雑中・一六九二)

隆信朝臣まうでこむと申しける目をわすれてもやあるらんとて、いひし日をたがふなよといふ事をくつかう

ぶりにおきてよみてつかはしける 後法性寺入道前関白太政大臣

いかにまたひとりあかすか忍ぶてふ人はつらしなおもひこりねよ (続千載和歌集・卷七・雑体・七二二)

733 雲晴る、天あまの小夜橋さよはした絶え間まかも門渡とわたり来らし七夕つめは

【他出文献】

ナシ。

【語釈】

○天の小夜橋―七夕の夜に鵜が天の河に渡す橋。○門―水流の出入りする所。海峡。○七夕つめ―織女。織女星の異名。

【通釈】

雲が晴れた天の小夜橋は絶え間ができたのか。天の河を渡って来るらしい織姫は。

【類歌・参考】

七日

ひさかたのあまの川きりたつときはたなはたつめのわたりなるらむ

(躬恒集Ⅳ・二七一)

月歌中に

前大納言為家

みるままに秋かぜさむしあまのはらとわたる月のよぞふけにける

(続古今和歌集・卷四・秋上・四二七)

三井寺にて月歌よみ侍りけるに

浄助法親王

雲はるるみかみの山の秋かぜにさざ浪とほくいづる月かけ

(続拾遺和歌集・卷八・雑秋・五八六)

734 紅くれなゐの八入やしほの雨ふぞ降りくらし龍田たつの山の色付見みれば

【他出文献】

(題しらず)

人麿

紅のやしほの雨はふりくらし竜田の山の色づくみれば

(新拾遺和歌集・卷五・秋下・五三九)

くれなるのやしほの雨はふりくらしつつたの山の色づく見れば

(古今和歌六帖・卷一・四八三)

【語釈】

○八入―幾度も染め汁にひたしてよく染めたもの。○龍田の山―大和国の歌枕。奈良県生駒郡斑鳩町と大阪府の境に位置する山。

【通釈】

紅の染料で幾度も染めた雨が降ってきたらしい。龍田山が色付くのを見ると。

【類歌・参考】

(題しらず)

藤原伊光

くれなるのやしほのをかのもみぢばをいかにそめよと猶しぐるらむ

(新勅撰和歌集・卷五・秋下・三四〇)

(天曆御時紅葉合に)

(読人不知)

くれなるのやしほの色はもみぢばに秋くははれる年にぞ有りける

(玉葉和歌集・卷五・秋下・七九五)

(題しらず)

(よみ人しらず)

いもがひもとくとむすぶとたつた山今ぞ紅葉の錦おりける

(後撰和歌集・卷七・秋下・三七六)

(題しらず)

雁なきて寒き朝の露ならし竜田の山をもみだす物は

(よみ人しらず)

(後撰和歌集・卷七・秋下・三七七)

735

思^{おも}はじと思^{おも}ふものから夏雨の振^ふり捨^すてがたき君にもある哉

【他出文献】

思はじとおもふものから夏の雨のふりすてがたき君にも有るかな

(古今和歌六帖・卷一・四七三)

【語釈】

○夏雨の―「振り捨て」を導く枕詞。○振り捨て―「降り」と「振り捨て」を掛ける。

【通釈】

思うまいと思ふものを見捨て難いあなたであることよ。

【類歌・参考】

返し

左近大将濟時

おもはじとおもふものから松山のすゑこす浪にそではぬれつつ

(統後撰和歌集・卷十七・雑中・一一六四)

後京極撰政、左大将に侍りける時、伊勢勅使にてくだり侍りけるにともなひて、すずかの関をこゆとて、花のもとにおりゐて読み侍りける

前中納言定家

えぞ過ぎぬこれやすずかの関ならむふりすてがたき花のかげかな

(新後撰和歌集・卷二・春下・九九)

秋歌とて

藤原敏行朝臣

すずむしの声みだれたる秋の野はふりすてがたき物にぞ有りける

(玉葉和歌集・卷四・秋上・六一四)

736

音きにいつき聞くあ斎りの宮すの有あ栖り河すたふゞ舟な岡をのわたりなりけり

【他出文献】

ナシ。

【語釈】

○斎の宮―紫野にある賀茂神社に奉仕する斎院の居所。○有栖河―山城国の歌枕。京都市北区の舟岡山の東から

紫野の賀茂齋院の側を流れ堀川に注いでいた川。「有栖川」と「在り」をかける。○舟岡―舟岡山とも。山城国の歌枕。現在の京都市北区紫野にある丘陵。○たゞ―ちよとど。○わたり―辺り。近所。「有栖川」―「舟岡」―「わたり」は縁語。

【通釈】

噂に高い齋の宮のある場所は、有栖川のちよとど舟岡の辺りであることよ。

【類歌・参考】

としをへてみゆきあるへきふなおかのまつならぬ身のおひそかなしき (躬恒Ⅰ・一五)

ふなをかにつむ人のつみはて、さしてゆくかたいつくなるらん (躬恒Ⅰ・一九)

ふなをかのみゆきの、ちはよるへなみしつむとわひし物おもひもなし (躬恒Ⅲ・一九三)

おなしとし十月十九日ふなをかに行幸ありしときに御乳母の命婦まへにめしてもみちをりてたてまつれとあり、ひとえたをりてこのうたをむすひつけてたてまつる

けふのひのさして、らせはふなをかのみちはいと、あかくそありける (躬恒Ⅳ・一九二)

737 朝風にまかせて瀬戸を渡るかな須磨の浦廻の海人のはし舟

【他出文献】

ナシ。

【語釈】

○まかせて―ゆだねて。したがって。○瀬戸―両岸が迫っている狭い海峡。○浦廻―浦のほitori。海岸線の湾曲したあたり。○はし舟―小舟。

【通釈】

朝風にまかせて狭い海峡を渡ることだ。須磨の浦のほとりの漁師の小舟は。

【類歌・参考】

百首歌めしける時、月のうたとてよませ給うける 崇徳院御製

玉よするうらわの風にそらはれてひかりをかはず秋のよの月 (千載和歌集・卷四・秋上・二八二)

題しらず 権大納言実衝

難波方々なみたかく風たちてうらわの千どり跡もさだめず (統千載和歌集・卷六・冬・六二七)

左近中将維盛、熊野浦にてうせにけるよしききてよみ侍りける

建礼門院右京大夫

かなしくもかかるうきめをみくまのうらわの浪に身をしづめける (風雅和歌集・卷十七・雑下・二〇〇六)

人のもとにつかはしける 清少納言

たよりある風もや吹くとまつしまによせて久しきあまのはし舟 (玉葉和歌集・卷九・恋一・二二五一)

海路を 中務卿宗尊親王

心なる道だに旅はかなしきに風にまかせていづるふな人 (新後撰和歌集・卷八・羈旅・五九四)

《これより歌合による補遺。平安朝歌合大成による》

738 ふりはへて花見はなみに来れば暗部山くらぶやまいと霞かすみのたちかくすらむ

【他出文献】

延喜十三年歌合

ただみね

ふりはへて花見にくればをぐら山いとどかすみの立ちかくすかな (夫木和歌抄・卷四・春四・一三三四)

ふりはへてはなみにくればくらふ山いと、かすみのたちかくすらん (興風集 I・六九)

【語釈】

○作者名—十卷本では「興風」。○ふりはへて—わざわざ。ことさらに。廿卷本では「さけりやと」。○暗部山—所在不明。近江、伊賀、山城等の説がある。廿卷本では「さくらはな」。○いとど—いよいよ。一層。

【通釈】

わざわざ花見に来ると、どうして暗い暗部山に一層霞が立ち、花を隠すのだろう。

【類歌・参考】

歌たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる つらゆき

かすがののわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ (古今和歌集・卷一・春上・二二)

くらぶ山にてよめる つらゆき

梅花にはふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有りける (古今和歌集・卷一・春上・三九)

題しらず 坂上これのり

わがこひにくらぶの山のさくら花まなくちるともかずはまさらじかすみ (古今和歌集・卷十二・恋二・五九〇)

泉殿御室にて人々歌よみけるに、霞中嶺梅と云題を

やへ霞くらふの山の梅か、は峰こす風につてにこそしれ (前参議教長卿集・七二)

739 花見つ、惜しむかひなく今日暮れてほかの春とや明日はなりなむ

【他出文献】

花見つつをしむかひなくけふくれて外の春とやあすはなりなん

(古今和歌六帖・第一・六七)

花見つつ惜むかひなくけふ暮れて外の春とや明日は成りなむ

(新撰朗詠集・上・五〇)

花みつつをしむかひなく今日見ればほかの春とやあすはなりなむ

(麗花集・二六)

はなみつつをしむかひなくけふくれてほかのはるとやあすはなりなん

(雲葉和歌集・卷三・春下・二七八)

【語釈】

○ほかの春―他の場所の春。よその春。

【通釈】

花を見ながら惜しむ甲斐もなく今日は暮れて春は過ぎ去って、他の場所の春と明日はなってしまうだろう。

▽三月晦日の歌。

【類歌・参考】

桜

左大弁

たぐひなく匂ふ宿かな桜花ほかの春をばなにか尋ねむ

(永承五年六月五日庚申祐子内親王家歌合・五四)

二百十二番 左勝

左京大夫

たちいでてほかの春をもみるべきにやどの花こそうしろめたけれ

(百首歌合 建長八年・四二三)

天曆の御時、方わかちて前栽あはせせさせたまひけるに、中宮の御かたに、はなのえたにてうのかたつくり
て、つけさせたまひけるに

こゝのへの露のおけはやはなの色のほかのあきにはにほひまされる

(清正集・二九)

疑真偽恋

吹きかへす椎の下葉のうら面ある世なみせそ外の秋かせ

(心敬集I・一七〇)